

# 文学館だより

令和 2 年 6 月 1 日  
若山牧水記念文学館  
TEL 0982-68-9511  
文 責 日 高

## かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ

いかにも心地よく酒を飲んでいる歌である。リズムも心地よい。徳利がいつのまにか一本から二本になっている。初句の「かんがへて」は飲もうか飲むまいか、あるいは一本にするか二本にするかを考えてという意味であろうが、もっと広く人生のさまざまなことを「かんがへて」と解釈してもおもしろい。 明治 45 年 6 月中旬頃詠。『死か芸術か』収録。 【伊藤一彦 『命の碎片』参照】

## 1ヶ月ぶりの開館です

想像だにできなかった新型コロナウイルス感染拡大の波連日トップニュースで報道され、心落ち着かない毎日が続きました。医療従事者をはじめ、最前線最優先で活動されていらっしゃる方々に敬意を表します。多くの方々のメッセージに元気をいただきながら、落ち着きを取り戻しつつあります。

私ども文学館も、約1ヶ月間の閉館が解かれ、5月16日（土）より開館の運びとなりました。お客様にはマスク着用ほか3密を避けるためのお願いごともありますが、落ち着きを取り戻し、安全と判断された際にはどうぞお立ち寄りください。みなさまのご来館をお待ちいたしております。



○椅子の数を減らし  
密集・密接を回避  
しています



○受付で距離を保って  
いただくよう、2番目の  
お客様には「わらじ」  
を表示しています

- 入口、受付には消毒液を設置しています
- 受付には透明シートを設置しています
- 職員はマスクを着用しています
- 換気に努めています
- ※団体様は小グループに分かれ、時間差を設けての見学をお願いしています

安心してご入館いただけるよう、さまざまな対策を講じておりますが、みなさまもご自身で万全の対策をされた上で、ご来館いただきますようお願いいたします。

## 企画展「牧水直筆原稿展」開催中です

本年度企画の核『三浦家寄贈資料公開展 繁と敏夫 一受け継がれた二人の絆』が開催できない今、代わって牧水直筆原稿「秋草と蟲の音（おしのね）」「森、湖、及び人」を展示しています。2作品とも単行本化されていない直筆原稿とあって、大変貴重な資料といえます。

「森、湖、及び人」は、大正11年に書かれ、『みなかみ紀行』よりあと、一人旅となった記録を喜志子へ宛てた手紙風に仕上げられています。原稿用紙23枚にも及びます。



「森、湖、及び人」1枚目

森、湖、及び人 一旅より妻への手紙、繪葉書一 若山牧水

溪間を少し歩いて、路は山にかつた。といふより森に入った。素晴らしい森だ。平地にならして五里四方あるといふ。樅、梅等、多く針葉樹の森林だ。昨日寄つて来たT一家の持山で、伐採期間四十五ヶ年とかの約束でツイ先頃某製糸会社に売渡されたものださうだ。

# 群馬県みなかみ町 見城光祐さん（小6） 牧水研究

「拝啓 若山牧水記念文学館様 ○○小学校6年見城光祐と申します。このたびは若山牧水さんについてのレポートをまとめているのですが、文学館にかざられている展示物などのことをくわしくお聞きしたいと思い、この手紙をかきました。（以下省略）」

昨年10月、丁寧な文字で1通の手紙が届きました。一人の人物について調べ、レポートにまとめるという課題が出されているようでした。とても小学生とは思えない視点での質問が書かれてあり、鮮明に記憶に残っていました。先月、その見城光祐さんからお礼の手紙と、9枚にまとめられたレポートが送られてきました。文字の丁寧さ、項目に沿った奥深いまとめ方、写真の切り取り、考察と感想までただただ感心するばかりでした。このご縁をきっかけに、光祐さんが今後さらに新しい発見を重ねられたり、牧水先生が残した歌を読み深めていかれたり、勝手な夢は広がるばかりです。

牧水先生と縁の深いみなかみ町に住む光祐さん、出会いをありがとうございました。

The image displays a grid of 9 numbered pages from a student's report. Page 1 features a drawing of a man in a hat and a landscape. Pages 2-9 contain handwritten text, photos of books, and other research materials.

この資料はラウンジでご覧いただけます。

## 今月の歌が詠まれたころ・・・

冒頭の「かんがへて～」の歌は明治45年6月中旬頃に詠まれた歌かと思われます。喜志子さんと結婚しておおよそ1ヶ月経った頃と重なります。その頃の喜志子さんの日記が残っています。

『 明治45年6月19日、晴れ、暑し、（略）牧水はまた旅に出たいと言ひ出した、私はその心持がよく判つてゐる故 共にすゝめた、いそいそとして心したくする。そして何のはづみであつたか、貧乏暮らしの事に話がうつつて来て、何とも云はれず心細い気がされて来てならなかつた、現在の二人の生活は贅沢すぎるからどうか方法を変更しやう、けれど僕の酒を止す位の事が目だつたけんやくであらう、と、私は哀れになつて物が言へなかつた。好きな酒、酒……それをやめるとは哀しい事だ。どんなにしてもそれだけは心持よく飲してやりたいと切に思つた。（略）夜、明朝出立の準備に何や彼や心せわしくあつた。（略） 』